

藝術学関連学会連合シンポジウム「芸術と記憶」

「ヒロシマの〈顔〉と記憶」 関村誠

現代の広島において、被爆記憶の保持と伝承は大きな問題である。これまでにもヒロシマの悲惨さのイメージは描かれてきたが、戦後生まれの世代が大部分を占める今日、悲惨なイメージからヒロシマの過去を想起し記憶に残していくことは困難になってきた。またイメージの氾濫ともいえる中で、われわれは、現れを十分に吟味したり、そこから想像力を駆動させることなく、表面的な部分で好悪の判断を下すにとどまることが多いように思われる。こうした状況の現代において、写実的な表象の手法を使いつつも、ヒロシマの記憶に寄与する試みとなったある実践を紹介し、その意義を考えていきたい。それは、広島市立大学の芸術学部において 2005 年以降行われている、現代に生きる被爆者、被爆二世、三世の方々をモデルとして、その肖像画を制作展示するというプロジェクト「光の肖像」展である。

この展示において重要なのは、絵画作品のみではなく、モデルとなった被爆者たちの体験や平和への想い、現在の生活などが文章として肖像画に添えられていることである。それによって、われわれは、絵画イメージを図像の単なる感覚的受容に終わらせることなく、モデルとなった方の人生の具体的展開も含めて理解した上で肖像画を鑑賞することになる。その結果、肖像画を見る者には、モデルの〈顔〉がある種特異な仕方で顕現し、表面的な現れの奥にある具体的な生に近づいていく心の働きが生じる。われわれは、肖像画の存在感自体にまずは引き込まれた後に、横に記された文を読み、再び絵に目を転ずると、眼差しは絵の表面でとどまることなく、肖像からの眼差しの働きかけに応じて、さらなる想像力の駆動へとつながっていく。テキストに記されたモデルの人生に関心を向けた上で作品を見るわれわれは、作品に現れた〈顔〉の前を素通りできず、何らかの対応する態度をもって眼差しの交錯の関係に参加せざるをえなくなるのである。ここでは、われわれは肖像画の眼差しのもつ特質を強く意識することになる。

この共感と想像力の駆動がなければ、過去の出来事を当事者として直接体験していない者が、それをたしかな記憶として受け継いでいくことはできないよ

うに思われる。静謐な表現の中の訴えかける〈顔〉に対峙し、現在に至る具体的な生のあり方を受け取ることが、過去の記憶を伝承していく基盤になるであろう。原爆の悲惨さの事実をリアルに捉えることに加えて、当事者の生と自己の生とを結びつける現在のアクチュアルな関わりに入っていく動きの中でこそ、記憶が保持され、その伝承が展開していくのではないだろうか。具体的な人間の人生の関係の網の目に身をおくように誘うことが肖像画の〈顔〉の訴え、呼びかけでもある。こうしたアクチュアルな関係において、記憶は成熟させていくべきものだと言えるであろう。